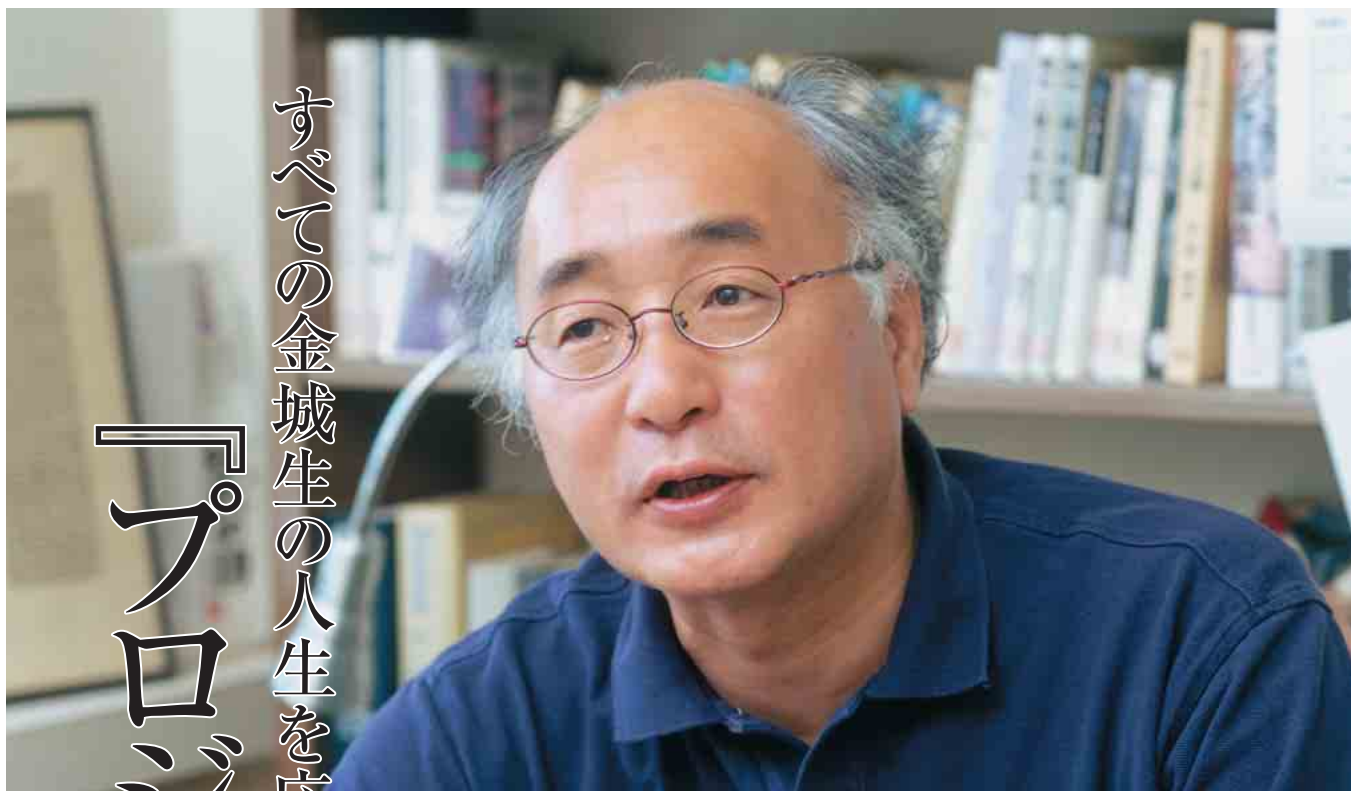


INTERVIEW

◎インタビュー／『プロジェクトK』について



すべての金城生の人生を応援するために

『プロジェクトK』始動

金城学院大学 人間科学部 心理学科 社会心理学専攻 森下伸也 教授

2004年4月から、金城学院大学では『プロジェクトK』が始まりました。『プロジェクトK』の“K”は金城学院の略で、いろいろな教育プログラムを新たに立ち上げていくプロジェクトのことです。プロジェクトK委員会の委員長である森下伸也教授に、どのような内容のものかを詳しくお伺いしました。

大学は学生たちの応援をするところ

プロジェクトK委員会は2003年6月に大学学生生活委員会の下部組織である、キャリア形成支援プロジェクト委員会として発足し、その後覚えやすくインパクトのある『プロジェクトK』に名称を変更。今年の4月から1年生を対象に実施の運びとなりました。メンバーは、袖山紘教務部長、現代文化学部 館輝和教授、人間科学部の宗方比佐子教授、戸田保学生支援部部長、安藤剛学生支援部課長、私の6名。全員が前向きで非常に熱心な委員であり、『プロジェクトK』の教員向け説明会までに、20回以上の会議を重ねました。

そもそものきっかけは、ゼミの学生たちが就職活動で悪戦苦闘をしている姿を見たことによります。就職活動は3年次の秋に本格化しますが、それから対応しても手遅れであることが多く、彼女たちが自分の望む将来へ進むことのできる

力を身に付けるためには、1年次から教育を始めなければならないと考えたことが第一歩でした。本学では、大学は学生たちの応援をするところ、卒業後の人生の土台をつくることだと考えています。自分の人生を自分の力で切り開いていく意欲・実力・自信が、卒業の段階ですべての学生に十分に備わっていることこそ、本学の教育目標です。それを効果的に達成していくために生まれたプログラムが『プロジェクトK』なのです。

『プロジェクトK』の基本的な考え方は、3つ

第1は、1・2年次の教育・指導が学生の将来にとって極めて重要であるということです。学生が自分の人生設計、職業、就職について早い段階から考えるようになるためには、入学時点から自覚を促す機会をできるだけ多く設ける必要があります。第2は、当たり前前のことが当たり前前にできる大人になってもらうことです。そのための主要なスキルとして、私たちは日本語表現力（特に話す力と作文力）、マナー（あいさつ、言葉使いなど）、社会的積極性（特に物事の段取り、仕切りの能力）を重視しています。第3は、教員の意識改革です。

大学に入学したばかりなのに、なぜ卒業後のことをすぐ考えなくてはならないのかと疑問に思うかもしれません。しかし、大学時代をいかに有効に活用するかということが、卒業後の人生を大きく左右します。後になって後悔しないためにも、『プロジェクトK』のような人生応援プログラムを大いに活用してもらいたいと思っています。

『プロジェクトK』7つの提案

委員会からは7つの提案をしました。①教育効果に関する数値目標の設定は、学科ごとに目標を設定し、卒業時点でどんな資格が取れたか、どういうところに就職できたか、どういう試験に受かったかなどの効果を測定し、検証を毎年行っていくものです。②個別指導の充実は、パソコンツーパーソン方式で学生を指導していこうというものです。各学科でアドバイザー制度やチューター制度を導入したり、従来の担任制度の機能を強化したり、ゼミを活かして行った

りと多彩で密度の濃い内容になっています。委員会としてもマニュアルを作ってバックアップしていきます。③キャリア開発教育科目は、本格導入が来年度からになりますが、学生が1年次から仕事や人生について考えていくことができるように必修科目として開設します。本年度はその前段階として、従来の科目の中に組み込んで開講しています。④自己啓発をしていくためのツール開発では、Kノート、Kウェブ、マナービデオの3種類を開発し、1年生全員に配



[Kウェブ]
<http://stud-support.kinjo-u.ac.jp/kweb/>



[職業データベースの世界へようこそ]
<http://db.jil.go.jp/welcome>

布しました。Kノートは自己啓発のための内容が詰まった本学オリジナルノートで、年次ごとに内容が増えていくファイル形式です。またKウェブでは、いつでもキャリアアセスメント（職業診断検査）を受けることができます。マナービデオの第1弾は『大学生のマナー 基礎編』でしたが、公衆道德編、インターンシップ編と続編もつくる予定です。⑤キャリアアップ講座は、作文・マナーの指導が無料で、できるようになるまで受けられるように充実しました。その他にも⑥1・2年次の就職オリエンテーションの実施、⑦『プロジェクトK』教員向け説明



会の実施があります。これらの7つの提案が有機的に集まってひとつの目的に向かっていくシステムこそが、『プロジェクトK』なのです。



[マナービデオ]

今年度は、不足なところや発展させなければならぬところをメンテナンスし

ながら、来年度に向けて土台をつくっていくことが仕事と考えています。